

日頃からの5W1Hの問い掛けが生徒の心を耕し、考える力を育む

——高校入試の出題傾向から見る言語活動の重要性

現行教育課程では、「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力等の育成」のバランスが重視されているが、知識・技能の習得を重視する傾向がまだまだであると聞く。2013年12月の上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウムで発表された高校入試問題研究結果も踏まえ、教員が意識を転換し、言語活動へ踏み出す重要性を提案する。

基礎・基本の定着に 完璧を求めすぎていないか

現行教育課程が全面実施されて2年が経ち、多くの学校において、言語活動を充実させるべく校内研修や教員の意識共有が進められていることが、弊社の調査から分かりました(P.4「課題整理」)。ところが同時に、「言語活動を行う時間が十分にとれない」ことを「とても感じる」と答えた教員は約17%に上り、「まあ感じる」も含めると、約68%が言語活動の時間が十分とれないことを課題に感じていました(P.5図5)。実際、中学校の先生方とお話をしている、その課題はよくうかがい

ます。理由の1つによく聞かれるのが、「高校入試を突破する力を付けることが最優先であり、まずは基礎・基本となる知識をしっかりと定着させなければならぬ」ということです。

知識・技能は確かに重要です。それがなければ活用できません。ただ、ここで少し考えていただきたいのは、「知識・技能を完璧に習得していなければ活用できないのか」ということです。例えば、テニスのサーブを打つ場合、10本中10本全てが入らなければ試合に出られないかといえ、そうではありません。3本しか入らなければ勝負にならないかもしれませんが、6本入れば試合は出来るでしょう。対戦相手がいて緊張感の中でサーブを打



ベネッセ教育総合研究所
グローバル教育研究室
主任研究員
加藤由美子
かとう・ゆみこ

◎グループ会社ベルリッツコーポレーションのシンガポール校
学校責任者等を経て、「ベネッセ子ども英語教室」カリキュラ
ムおよび講師養成プログラム開発等、ベネッセコーポレーシ
ョンの英語教育事業開発に携わる。現在は、ARCLE(※)に
てECF(幼児から成人まで一貫した英語教育のための理論的
枠組み)の開発、英語教育に関する研究を担当。

*ARCLE(Arcle, Action Research Center for Language
Education)は、ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会
です。日本の小中高の英語教育の課題を検討するシンポジウムを開催
しています。詳しくは、<http://www.arcle.jp/>

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

場合と、相手がいないコートに向かつて黙々とサーブを打つ場合では、成功率も違うはず。試合を行うことで、練習で学んだ基礎的な技能が磨かれ、確かな力として定着していくのです。

サーブの打ち方が「分かる」からといって、必ずしもサーブが「打てる」わけではない——授業でも同じことがいえると思います。例えば、英語学習においては、単語や文法をみっちり勉強しても、外国人と英語で話したり、自分で英文を書いたり出来ないことが、長年課題となつています。覚えた単語や文法を使う練習を十分積んでいないから、いざ外国人を相手にした時に話すことが出来ないのです。習得した知識・技能が人生において使えるものとなるように、それらを使って思考し、判断し、表現する場面を授業の中でもっと設けてほしいということが、現行教育課程での改訂のポイントでした。

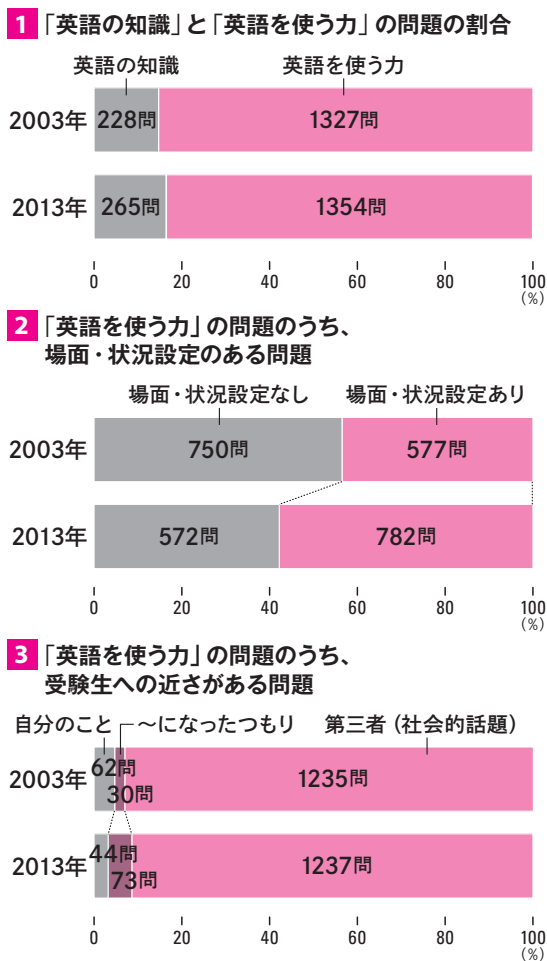
高校入試でも、知識を使い、考え、表現する力が求められる

それでは、高校入試では、学習指導要領の目指す方向に向かつて、知識・技能を活用する問題や思考力・判断力・表現力を問う問題が増えているのか。その疑問の答えの1つとして示したいのが、ベネッセ教育総合研究所が運営する「ARCLE」*が2013年12月に開いたシンポジウムで発表した、高校

入試の英語の問題についての研究結果です。

47都道府県の公立高校入試について、03年分と13年分の英語の問題を調べたところ、03年、13年共に「英語を使う力」を問う問題の量は8割以上ありました(図1-1)。更に、「英語の知識」を問う問題と「英語を使う力」を問う問題の比率は、03年と13年とでほぼ変化はありませんでした。ここでのいう「英語を使う力」は、学習指導要領の観点別評価における「外国語理解の能力」「外国語表現の能力」であり、「聞く・読む」力、「話す・書く」力と、複数技能を統合して使う力を含めています。つまり、少なくとも10年前から、公立高校入試では、「英語の知識・技能を活用する力、すなわち思考力・判断力・表現力が問われていることが明らかになったのです。

図1 高校入試 英語の問題分析の結果



出典/巨理陽一・石井亨・小川登子・奥住桂・加藤由美子・吉池陽子・根岸雅史「全国47都道府県の高校入試分析から考えるテストデザインと中学校3年間の指導」(2013 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム)

分析観点別に見ると、「場面・状況設定」のある問題(図1-2)と、受験者への近さにおいて「～になったつもり」と状況設定をしている問題も、少しですが増えていました(図1-3)。出題形式を見ると、語数を指定する英文記述問題が、03年の63問に対し、13年では101問に増えていました。リスニング問題を単独で出すことが減り、聞いた後で読ませたり書かせたりする技能統合問題が増えていくことも、特徴に挙げられていました。

私は3年前に進研ゼミ中学講座の教科研究で高校入試分析をしていましたが、英語以外の教科においても、知識を活用した、思考力・判断力・表現力を問う問題は既に出されてきました(P.24 図2)。知識を組み合わせ、複数の条件を基に考える力は、日常生活で起き

る問題を解決する力となります。高校入試でそうした力を測る問題が出ているのは、中学校卒業までにどんな力を身に付けてほしいのかというメッセージだと思っております。

知っていることで考える姿勢を身に付けていく

シンポジウムでは、高校入試問題分析の研究メンバーの先生3人が、良問と考える高校入試問題と、それに対応できる英語力を付けるための指導を提案しました。英語の指導ですが、言語活動の工夫として他教科にも参考になる点があると思いますので紹介します。

◎意識して読む「能動的な読解」へ

東京都立白鷗^{はくおう}高校附属中学校の小川登子先生は、「受動的な読解」から「能動的な読解」への転換を提案しました。ただ課題文を読んでも答えさせるのではなく、「次はどのような展開になると思うか」「あなたはどのように思うか」など、テーマに沿って投げ掛け、生徒に考えながら読解させるというものです。分析的かつ統合的な読解をさせるために、「タイトルから内容を予測させる」「キーワードからブレンディングを行わせる」「ばらばらになったパラグラフの並び変えをさせる」「トピックセンテンスとサポーティングセンテンスとのつながりを考えさせる」ことを取り入れているとのことでした。どの教科でも、課題文を読む時に何らかの目的を与えておくことで、生

図2 高校入試問題例

◎2009年度 茨城県の公立高校の国語

2つの課題文の内容を踏まえた上で、班の代表者としてクラスで発表する原稿を指定の字数で書くという問題が出ています。場面が設定されており、複数の条件を踏まえた上で、自分の意見を書く問題です。

◎2010年度 青森県の公立高校前期選抜の理科

日没直後に南東の空に見えた月の形を、解答用紙の破線をなぞって書くという問題が出ました。太陽・地球・月の位置関係、時間的条件などを総合的に把握しなければ解けない問題です。

徒の読む姿勢や読み取る深さが変わるのでないでしょうか。

◎生徒が考えたい、伝えたい題材を

埼玉県宮代町立前原中学校の奥住桂先生は、ライティングの指導ポイントの1つとして、既習事項を使うトピックをスパイラルに出していくことを挙げました。例えば、日記を書く活動も1回で終わりではなく、1年生、2年生、3年生と繰り返し、それぞれの段階の既習事項を使って書かせるそうです。また、教科書の本文をライティングの素材や模範解答として活用。場面絵を参考にして教科書本文を再生する活動や、1レッスンの中から物語の核となる英文を10文選び、つなぎ合わせてサマリーを作る活動などを行っていました。

東京都千代田区立九段中等教育学校の石井亨先生は、リーディングからライティング

の統合的な指導では、それに適したユニット（レッスン）を探し、年2、3回指導できるように年間指導計画を立てることが大切だといえます。教材は、物語や説明文などを自分で読み、生徒が心を動かされると思うものを選び、既習の言語材料で例文を作成します。生徒の目線で書くことで、活動の目的や書く対象、必要な語彙や文構造が明らかになり、どのように評価を行うべきかも明確になります。また、最初から英語で書かせることも大切だと強調していました。初めに日本語で書くと、それを英訳しようとして行き詰まってしまうからです。「今の自分に書ける英語」で表現するように指導しているといえます。

奥住先生と石井先生の発表に共通することの1つは、既習事項の活用です。こうした活動を繰り返すことで、何か正解があつて、それが出来ないと言ってしまうのではなく、今持っている知識や技能を工夫して活用するという意識が、生徒に根付くことでしょうか。

また、活動をする際は、生徒の内発的動機が生まれそうなトピックを選んでいることも共通項です。ある先生は、デイベートの題材は生徒に決めさせると言っていました。「AとB、どちらのキャラクターが売れると思う？」とあまり教育的ではなさそうなテーマでも、生徒が興味のあるトピックであれば、真剣に準備をして活発なデイベートになるからだと思います。「考えたい、伝えたい」と思えば、生

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

徒からいろいろな発言があり、より多様な考えや表現を共有できるでしょう。

◎3年間を見通した指導計画の重要性

また、3人の先生に共通しているのは、3年間を見通した指導計画を立てていることでした。卒業時の達成目標を立て、そこに向けて1年生から知識・技能を積み上げ、それをうまく活用する言語活動を取り入れていました。1年生で言語活動をたくさん行っても、2年生では習得中心の授業になると、思考力・判断力・表現力が磨かれていきません。ですから、校長や教科主任が主導して、1つの学校共通で3年間の指導を考えることがとても重要だと考えます。

答えが返ってこなくても 問い続け、考えさせる

最後に、シンポジウムやこれまでの自分の研究を通して、言語活動で重要になると感じたことを伝えたいと思います。

1つは生徒に問い続ける大切さです。質問をしたら生徒にはすぐに正解を言ってもらいたいと期待し、「うちの生徒では答えが返ってこないから言語活動は行いにくい」という先生がいるかもしれません。しかし、言語活動では、まずは「考える」だけでも十分です。「どう思うのか」「その理由は何か」など、5W1Hで投げ掛けて、普段から考えさせ、心を耕していけば、いつかは自分の意見として判断

し、それを伝えようと表現するようになるでしょう。「分かりましたか」と質問してしまつてたら、「分かりました」か「分かりません」と答えるだけで、考える余地がありません。

また、授業で行った言語活動を反映した定期考査にすることも大切です。思考力・判断力・表現力を問う問題がテストに出なければ、生徒は「本当は必要ないのだ」と捉えてしまふでしょう。同様の意味で、テストの得点だけで評価をしないことも重要です。活動中に見せる関心・意欲・態度もきちんと評価すべきであり、観点別評価はここで生きてきます。言語活動を指導に取り入れることは、指導時間確保の面、これまでと違う指導を行うという面で大変かもしれませんが、言語活動をうまく取り入れているスーパerteacherと呼ばれる先生方に、どうやってうまく出来る

ようになったのかをうかがってみると、とにかくトライ&エラーであることが分かります。重要なのは一歩踏み出す勇氣を持つことではないでしょうか。

教材はまず教科書が活用できるように。シンポジウムに登壇された大学教員は、自分が制作に携わった教科書は文法事項を学ぶ「習得ページ」と、実際の文脈の中で使う「活用ページ」で構成されているが、視察した中学校では多くの先生が活用ページを省略していても構わないと感じたと、発言されていました。英語に限らず、活用や発展のページが教科書にあると思います。まずそれを授業でしっかり取り上げることが、言語活動を行う初めの一歩になると思います。



「えいごネット」は、英語指導に関する教材・素材、事例・指導案などが掲載されているポータルサイト。指導例や教材集めは、インターネットの活用もポイントとなる
<http://www.eigo-net.jp/>

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム 開催報告レポートのご案内

これからの英語の指導と学びを考える ——全国の高校入試分析結果と中学生の英語学習実態をもとに——

記事で紹介したシンポジウムは、2013年12月に上智大学で開催し、全国から270名を超える方々にご参加いただきました。中学校・高校の英語教育についての指導事例のご紹介や、ご参加の先生方とパネリストとの意見交換も行いました。シンポジウムの詳細なレポートは、下記ウェブサイトに掲載しております。報告書もダウンロードできます。今後のご指導を考える上でのご参考になりましたら幸いです。



詳しくは <http://www.arcl.jp/>